

「栽培漁業」の語義に関する参考文献

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 泰雄, 野中, 忠 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2014500

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



資料

「栽培漁業」の語義に関する参考文献

故大島泰雄

Bibliographical Notes on the Concept of Sea Farming

The late Yasuo OHSHIMA

- 1) 本間昭郎 (1967) 栽培漁業. 水産科学, **13**(1), 13-20.
- 2) 本間昭郎 (1969) 栽培漁業. つくる漁業 (資源協会刊), 49-65.
- 3) 手塚多喜男 (1970) 栽培漁業の現状と問題点. 水産振興, **4**(4) (通刊 32), pp. 28.
- 4) 沿岸漁業開発対策研究会・全国漁業協同組合連合会 (1970) 沿岸漁業資源・漁場開発の背景と対策. 別刷, pp. 68.
- 5) 手塚多喜男 (1972) 栽培漁業の考え方と進め方. さいばい, (3), 6-8.
- 6) 本間昭郎 (1973) 栽培漁業のことはじめ. さいばい, (創立 10 周年記念号), 7-16.
- 7) 長谷川 彰 (1973) 栽培漁業の経済的諸問題. 系統ジャーナル, 2月号・3月号, 40-44・47-49.
- 8) 科学技術庁資源調査部 (1974) 我が国における水産増殖及び養殖の将来の方向に関する調査報告. 資源調査会報告, (68), pp. 73.
- 9) 瀬戸内海栽培漁業協会 (1975) 瀬戸内海栽培漁業の今後の進め方 (昭和 49 年度顧問会議議事録, 別刷), pp. 23.
- 10) 花村宣彦 (1975) 資源培養型漁業について. 南西海区水産研究所パンフレット, pp. 14.
- 11) 日本経済新聞 (1975) 宝庫回生—あすの瀬戸内海漁業 (1)~(10). 昭和 50 年 8 月 19 日~9 月 6 日号.
- 12) 大島泰雄 (1976) 沿岸漁業の増産と資源培養—その役割と可能性—. 化学と生物, **4**(5), 298-299.
- 13) 佐藤重勝 (1976) つくる漁業の資源論. 新版つくる漁業 (農林統計協会刊), 92-100.
- 14) 浅野一郎 (1977) 栽培漁業. 日本水産資源保護協会漁政叢書 (12), pp. 139.
- 15) 大島泰雄 (1978) 瀬戸内海における栽培漁業の現状と将来の方向. 北海道水産資源技術開発協会刊, 育てる漁業研究会要録, 5-15.
- 16) 本間昭郎 (1980) 栽培漁業の現状と将来—栽培漁業と海洋利用—. 国立国会図書館調査立法考査局調査資料, **79**(3), 1-22.
- 17) 恩田幸雄 (1981) 栽培漁業の現状と展望. 水産振興, **15**(7) (通刊 163), pp. 24.
- 18) 大島泰雄 (1981) 栽培漁業の現状とその展望. 公庫月報, (5), 37-43.
- 19) 松岡玳良 (1981) 栽培漁業の現状と展望. 資源, **34**(211), 37-43.
- 20) 本間昭郎 (1982) 栽培漁業の課題. 水産資料四季報, **9**(1, 2), 3-12.
- 21) 佐藤重勝 (1982) 栽培漁業の技術的課題. 西日本漁業経済論集, (23), 1-13.
- 22) 静岡県栽培漁業推進検討会 (1982) 静岡県栽培漁業の方向. 静岡水試パンフレット, pp. 19.
- 23) 北田修一 (1983) 栽培漁業と漁協の指導事業. 漁協経営 (日刊), (25), 10-15.
- 24) 日本栽培漁業協会 (1983) 協会 20 年史. 日本栽培漁業協会刊, pp. 95.
- 25) 長谷川 彰 (1984) 栽培漁業の経済と課題. 水産振興, **18**(1) (通刊 193), pp. 27.
- 26) 本間昭郎 (1984) 育てる漁業. 時事評論, **15**(11) (通刊 279), 17-39.

追記 栽培漁業を再認識するために

野 中 忠

以上は、大島泰雄先生の御遺品の内に蔵されていた、横書き 200 字詰原稿用紙 8 枚にわたり記された文献表である。先生が、表題に「語義」の語を入れられておられたのは、栽培漁業とは何かということを問い続けておられて、その基本文献を纏められたものと考えられる。編集部の意向により、広く栽培漁業を考えていただくための出発点としてここに掲載した。

栽培漁業は、1963 年に社団法人瀬戸内海栽培漁業協会が創設されたことを出発点とすると、既に 36 年の歴史を経た。その発足当時は、わが国の沿岸漁業を支える救世主的な期待が持たれていた。その後の展開のなかで、事業化が進みその効果が検討されるうちに、事業継続のため受益者負担のかたがが次第に定着し、事業として日常化してきた。しかし、最近の日本経済の不振は、そうした栽培漁業の事業展開にも大きな影を落としている。また、やや遅れて登場した資源管理・漁業管理の運動が、栽培漁業事業に化わって次の救世主的役割を演じているような局面も見える。日常化と状況の変化により、栽培漁業は発足当時の輝きが何となく褪せて来ているように感じられる。

水産増殖の立場から考えれば、栽培漁業一特に種苗放流事業も、資源管理型漁業あるいは漁業管理も、沿岸漁場整備事業一特に漁場造成事業も、いずれかの一つだけで漁業を維持・発展することは出来ないで、漁業にとっては状況に応じてそれぞれが役割を果たしながら補完し合うことが求められる。漁業にとっては、これらの事業、方法の間に優劣があるのではなく、その場の状況

に応じていずれかの手段を優先するかどうかの問題であり、画一的にいずれかの事業に傾斜することは好ましくないと考えられる。

それにしても、積極的に資源補強をしようとして、それを強力に実践してきた栽培漁業の考え方は世界に類を見ないことであり、誇るべき事柄であろう。栽培漁業の種苗生産・放流技術のみでなく、その考え方そのものを世界に示すことができる。しかし、栽培漁業の考え方がどれほど整理されているのだろうかと考えてみると心もとない。幾度かの整理の試みにかかわらず、当初の理念と現実に展開される事業との間で、さまざまな考え方が渦巻いているのが現実である。集団や個人はそれぞれ明確あるいは曖昧な栽培漁業観をもっているが、それぞれの間の懸隔は大きいようだ。そこで、それぞれがその懸隔を知り、それぞれの栽培漁業観を整理する必要があるように思われる。

そのために、栽培漁業に関する文献を網羅しておくことが肝要であり、その役割を日本栽培漁業協会に期待したい。技術問題もさることながら、特に栽培漁業の考え方・その思想に関して網羅することを求めたい。勿論、文献を網羅するのが目的ではなく考えるための資料として活用されることが目的であるが、文献センターが出来ることを望みたい。

先生のこの文献表を第一歩として、協会がそうした役割を進めて下されば後世は幸いするだろう。その際に、積極的推進の立場のみでなく批判論文も敢えて加える寛容さを以てあたって頂くことも必要であろう。